

# 竹の子川柳会

たんぎくのみんなのゆめが光ってる

小二 小原 麗羽

ゆらゆらとクラゲが海にうかんでる

小四 梶野 峰士

まだ開けてねてたら虫がやって来た

小四 淵本ななみ

よりにより台風が来る休みの日

小六 清原 瑠依

虫めがね鏡みたいにはねかえる

小六 吉良ちひろ

鏡見るどこか変かな大丈夫

中一 清原 沙耶

クリスマスキラキラ光る冬の町

中三 池田 奈緒

反省し心の鏡見直そう

高一 渋谷 裕紀

いつだって光るスマイル宝物

高一 山口はると

幸せの人生くると信じてる

高一 横 美琴

鏡見てきれいになれと暗示かけ

高二 藤森 柚樹

気分わるゆらゆらしてる船の上

高三 横 晋平

身だしなみ鏡チェックし完璧だ

高三 梶田 拓也

鏡越し移る姿に迷う猫

高三 濱松 和希

追伸で書いた本音がいらしい

宮川 柳酔

大物に加勢の蟻も炎天下

渡辺 照子

ぎりぎりへ自己を追い込み肚を練る

山本 雅之

限界集落もうぎりぎりの人の数

渡辺 光男

飛び乗った息たえだえに発車ベル

男武志津江

ぎりぎりの線で治まる妥協案

栗木 一郎

天才の眼鏡きらりと思考する

米子 達雄

嫁ぐ娘に眼鏡で匿す筋一つ

若宮 賢敬

両親の眼鏡にこない来た養子

熊本 忠真

辿り辿ってやっと見つけた古眼鏡

宇津本アヤ子

朝帰り家の敷居がちと高い

川添 忠昭

匙加減ひとつで転ぶ善と悪

水野すみこ

街並の畳んだ店に過疎の風

松本タツコ

# ひよし川柳会

## 鬼北の足跡を辿る…【第11回】

### 泉貨紙

現在、ハガキやさまざまな工芸品に使用されるなど人気の高い泉貨紙ですが、その歴史は戦国時代にさかのぼります。

戦国末期、西園寺家の武将・

土居(兵頭)太郎右衛門が、隠居して現在の西予市野村の安楽寺にて、楮を主材料とした

厚紙の製法を研究したのが起源と伝えられています。土居

太郎右衛門の死後、宇和島藩より「泉貨居士」の法号が与えられ、泉貨紙の名前の由来

となつていきます。この紙は、二枚の紙をすいた直後に張り

合わせて、一枚の紙に仕上げ

るのが特徴で、団扇・はりこ・合羽など日用品に使用される強靱な工作用紙として広く普及していきました。

明治初期、泉村上川(現在の鬼北町)の畔地類吉が、それまでの泉貨紙の製法に独自の改良を加え、極めて高品質の泉貨紙を作り出しました。

この技術は近隣に伝わり、泉村周辺は泉貨紙の産地として発展し、やがてこの地域の泉貨紙は「仲仙紙」とも呼ばれるようになってブランドを確立するに至りました。戦後の

高度経済成長の中、安価なパルプの台頭により紙すきは衰退していきませんが、昭和60年に泉貨紙保存会が設立され、小倉コミュニティセンター

を拠点に、和紙製造の生産技術が伝承されています。

紙すき作業はこれから春にかけてが最盛期。小倉コミュニティセンター下の広見川で、泉貨紙の原料「楮(こうぞ)」の寒ざらしの風景が見られることでしょう。



紙すき作業の様子